678

特241
58

山田磐楠述

国體明徴と宗教

始

特241
58

國體明徵と宗教

貴族院議員 男爵 井田磐楠

此の小册子は井田閣下が去る八月二十七日品川本光寺に於ける「立正安國會」にて講演されしものの筆記である。

國體明徵と宗教

貴族院議員 男爵 井田磐楠

私は佛門禪宗に歸依して居るものである。今日の御集りの衆は日蓮宗の方々であるが、私は私の信仰を通じて今日の時勢を論じたいと思ふ。臨濟錄と云ふ本がある。これは臨濟禪師の語錄則ち問答體であるが、府主王常侍の請に應じて上堂されたときの問答が其卷頭に在る「山僧今日事止むを得ず曲げて人情に順つて此の堂に上る」とあるが、今日私も亦御招請を御斷りし難く矢張り人情に順ふ。敢へて此の高座を汚す次第である。

臨濟は語を續ける「宗門の大事を稱揚せんとすれば口を開くことも出來ん。見

性大悟の一大事、何の口を開べきの道があらうぞ、もの一旦路を迷へば壁立萬仞足の踏み處はないぞ」と提唱した。人は迷ひに迷ひ拔いて佛教の功德を受けるのであるが、他力宗でも信仰は口から口へ傳えた丈のものではない。南無妙法蓮華經と云ふ日蓮宗の信仰は、單に口で人に傳えたものであつてはならぬ。自分の心の深みから南無妙法蓮華經と叫び得るの信心でなければならぬ。

日蓮宗は自力宗であるが、自力、他力と云つても、麓の道は異るも畢竟同じ高嶺の月を見る樣なもので、佛教は釋迦が說いたもので、歸する處は同じである。一心に信心して佛と一體となることが宗教の本旨である。

唯だ禪宗は自力宗だから、前述の如くに「直是開口不得」とて冷暖自和を唱へるのである。私の如きものが其口を開けば家醜を外に曝すことになる。けれども臨濟は問答を續けて「己れは何も隱しもせん、御宗旨の大綱を示すぞよ、御前達は勇士だから戰ふたらどうか、さあ御悟りの證據を出して看せよ」と挑みかけられた。すると、一人の僧侶が臨濟に向つて、

「如何是佛法大意」

と尋ねた。これは根本の質問であるが、臨濟は唯だ簡單に、

「喝！」

と一喝したのみである。是は誠に譯の分からぬ事の樣であるが、此の臨濟禪師の「喝！」と云つた處に自分の見性大悟の全體を眞ッ裸に出して居るのである。これが禪宗の行き方である。

理論を詰めぬいた所、卽ち教理の究竟は、理論を離れた信仰である。自力の信念の奧底にも深い經典がある。他力の奧底にも佛教の眞理がある。同じ流れが違つて流れて居るのである。

臨濟禪師は「喝！」の一喝に依つて體驗して居られる悟を示された所謂不立文字である。今私は少し理窟を述べざるを得ない。第二義底より。

思惟は普遍、特殊、箇の三態に別ち、抽象的に說かれる。其の平等に考える見方、之は所謂惡平等で、すべての物を一樣に見る。併し世の中はそう皆平なものではない。一口に人間とは云ふが、男だけでも、女だけでも人間ではない。人間と云ふのは男女がよつて始めて人間である。而して此の人間が男女の別以外に、或は老人、或は幼弱、腕力家、智惠者と云つた樣に特殊的に分かれ、各異各樣である。

宗敎と申せば平等普遍には、神佛と人間との關係を信仰に依つてつないで行くもので、神佛と小さな人間との關係である。神佛によつて醜ひ自分を救つて戴く關係である。これは耶蘇敎でも同じである。併し宗敎の平等普遍性にも、國柄による特殊性が生じて來る。佛敎が東洋に於いて勃興し、マホメット敎が中央亞細亞やアラビヤに盛んになり、耶蘇敎が西洋に擴がると云ふ現象は、平等な宗敎に特異性をあらはしたものである。而して此の佛敎自身が夫れと特殊に別れる。

卽ち、眞言宗だとか、律宗だとか、日蓮宗、禪宗だとか種々ある。これが世の中である。世の中は元來、變つたもので組織されたものである。一つとして同じものはない。現實はすべて平等でない。この違つた所に味があるのである。如何に絕世の美人でも、同じ樣な美人が澤山集れば美人でなくなる。全世界が同じ樣な美人だけになれば、却つて一つ目の化物みたいな女が或は美人とよばれるかも分からない。

如何に立派な庭の松でも、一樣な松が何處にも彼處にもある樣になれば、決して美しくはなくなるのである。梅、竹等があつてこそ始めて松の美が引きたつのである。此の平等でないところに莊嚴がある。特殊は莊嚴だ。

佛敎は人間を理想の世界に結びつける事であるが、その世界と云ふものは、世の中を離れたものでは決してない。現實の此の土と共に一處になつた大きな絕對の世界なのである。

強陀の世界に行くと云ふと、別な世界がある樣に考えるが、之は間違ひで、彌陀の世界は此の土と共にあるのである。それを此の國土の他にあるなどと考えた時は、彌陀の世界が極く小さなものになつて仕舞ふ。一切合財を含んだものが彌陀の世界である。此の現實の世界が、其の儘彌陀の世界であるのであるから、矛盾が兎角起きる。而し之は矛盾がある樣に佛樣がお造りになつて居るのである。その因緣を以つて人間は生れて居るのである。强いものもあれば弱い者もあるのである。それが有り難い佛の慈悲である。宗教に依つては、現實の世界と離れた別の世界を考えるが、それは誤りである。私共は現實の世界に彌陀の世界を出現させることに努力しなければならない。

淨土のみに佛は居られるものでない。穢土にも佛は住まはれる。此の世で阿彌陀、釋迦、日蓮等に會ふことは遠慮の入らぬ事である。現實の國土と全然離れては有るものではない。佛敎は日本に渡來してから、一時は日本の國體に副はないものとして、政治上の爭があつた。それも日蓮、親鸞、道元等各宗派の開祖が現れて、日本國土と密接になつた。則ち鎭護國家となつた。

宗敎はかくの如く現實世界と、切つても切れないものである。切り離しては却つて矛盾がある。假令へ佛敎が各宗派に別れて居て、其の說き方や信仰の對象が違ふと云つても、日本の國土と切つても切れない形で、發展して居ることは誠に有り難い點である。則ち國家の鎭護として日蓮上人は立正安國を、榮西禪師は興禪護國を、傳敎大師は守護國界章を說き給ふたのである。

私は合掌をして祖師それぞれに、最も現實的に說いた功績に禮を云ひたい。これは佛敎のみならず、耶蘇敎に於いても國土とは決して離れて居ない。歐洲大戰には夫々自分の國の爲め命を捧げて鬪つた。

宗敎は現實と離れたものの樣に考えられて、最も現實と密接である。日本佛敎に於いては殊に然りと思ふ。

然るに問題は急に飛ぶが、最近蘇聯と云ふ得體の知れぬ國が生れた。蘇聯は宗教を否定して居る國である。此の國は、全く科學方則によつてすべてが說かれてある。一切合財が科學方則に基いた國である。精神的の事柄を棄て去つた國である。經濟の分配を平等、卽ち惡平等にして、一切よいとして居る國である。勿論人間は霞を喰つて生きて居る事は出來ないが、最も大切なものは、萬物の靈長としての精神的方面である。食ふ許りなら人間も動物と同じである。しかも自然は動物に良い草を喰はせもし、他のものには惡い草を喰せもして、食物は平等に與へられない。人間は食ふことのみに生きては居らぬ。靈に生くる人間は最も安らかな信念に生きなければならない。

宗教を否定しても、夜大空を仰ぎ星を見、顧りて自己を省みるとき、科學だけでは解決し得ない何物かを感ずるであらう。親に別れ子を失ふ悲みの情緒は、

起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな

とんぼ釣今日はどこ迄行つたやら

宗教心を起さざるを得ないものである。

然るに宗教否定の蘇聯では、過去に於て寺院を壞し、僧侶、信徒を獄に投じ、之れを殺戮し、或は個人の家の十字架迄も踏みにじると云ふ、むごたらしい事をして否定のために狂奔した。革命以來今日まで、四千萬人の多數の國民を犧牲にした。太田大使の報告によると、第一次五年計畫時の饑饉に於て、ウクラインに於て四百萬人の餓死者を出した。蘇聯の饑饉は自然的のものばかりではなく、人爲的、政治的のものである。何となれば、蘇聯の農業政策が誤つて居るからである。

蘇聯の農業政策は、農民が働かない樣な組織である。本年の如きは氣溫が高いので、實も早くよく豐作であるに拘らず饑饉が豫想されてゐる。誠に辻褄の合はぬ合點の行かぬことであるが、これは本年の豐熟が早かつたので、政府の平年通

りの一般計畫では實行が出來ぬため、非常に狼狽して收獲にかかると云つた樣な具合で、取り入れる前に早くも落穗となつた場所が尠くないと云ふ結果が現はれたので、農作饑饉がおこる譯である。

かくの如く、蘇聯は妙な政治の國であり、人を殺すことを何とも思はぬ野蠻な國であり、又宗教を徹底的に排擊する國である。すべてを機械的に考へる國である。我國はかくの如き不可思議の國を隣りにもつて居るのである。蘇聯の宗教否定運動は、或は宗教の馬鹿らしいことを示すために、惡口宣傳を盡した繪畫等を博物館に陳列し、或は權力により、或は文書によつて無宗教を鼓吹して居る。獨裁者スターリンは、

「私は宗教には反對である。何となれば、私は學術の味方であるからである」

と云つて居る。この言葉に對し、國民の正當なる批判を乞ふ次第である。

蘇聯では又、反宗教宣傳の爲に切りに學者を使ふ。「學術的反宗教公債」と云ふものを發行し、學者にその公債を買ふ代りに反宗教の講演をやらして、無代でその公債を學者に與れると云ふ方法を講したのであるから、學者は到る處で强請的に又、自發的に反宗教の講演に大童である。文部省又卒先して反宗教々育を高唱して居る。

日本は最近、國體を明徵にせねばならぬことが叫ばれる樣になつた。宗教は憲法で自由を保障されて居る。蘇聯では、萬一兩親が宗教を信じて居ると、之に對し子供が無宗教、反宗教で鬪爭する樣教育すべく訓令されて居る。卽ち宗教に對する鬪爭が「社會主義の爲めの鬪爭である」と云ふイデオロギイに於いて宗教排斥に憂身をやつして居るのである。信教の自由も最初はバプテスト派及福音派には許してゐたが、これも五ヶ年計畫實施以來、その敵として鬪ふ樣になり、信仰の自由と禮拜の自由だけは表面的には許して居たが、布教は絕對に禁じた。而も信仰の自由も禮拜の自由も、內實は非常な壓迫を加えて居る。

元來、宗教と云ふものは平和的なものである。口に戰爭反對を叫び平和を唱えて居る蘇聯が、平和である宗教を特に否定し排擊し、四千萬人の國民を殺した。例へば、國境を超え一箇の角砂糖を手に入れんとする子供すら、國境を無斷で超えたといふので、直ちに現場で射擊するといふ慘酷さである。

元來、露西亞人個人は鈍重で、人は善いのであるが、政治當局は主としてユダヤ人であつて、彼等がバン一切れを得るために、夕方から翌朝まで行列を作つて甘んじて居る程の國民を、いやが上にも壓政を加えて居る。

蘇聯の政治は革命以來、種々と社會主義の理想を行つて見たが、根本的に違算を生じ、遂に憲法の改正をなす破目に至つたが、表面民主々義で共產主義を粉飾したものである。外國の共產主義に對する嫌惡を緩和する爲めの手段であり、內に至りては國民の不評判を緩和せんとして自由を許すことを標榜したものに過ぎず。實行は依然として信教の自由、其他の暴壓が加えられてゐる、頗る眉つばものである。蘇聯は從來から階級鬪爭の爲には如何なる犧牲も平氣で行つて來た。その主義の爲に人民を殺す位何とも思つて居ない。

加之各國に共產主義を宣傳し、階級鬪爭を煽り立と攪亂をしてゐる。且世界最大の軍備を完成し、我が國も之れが爲め軍備を充實するの止むなきに到らしめられて居る。共產主義を威力で世界に實行せんとしつゝあるのである。否な現に支那等には實力を行使してゐるであるから、蘇聯の口にする平和は、その實、平和ではないのである。平和でないから、平和主義の宗教に對して鬪ひを挑んで居るのである。自由のない國で信教は否定されてゐる。

現在、此の蘇聯を中心とする反宗教運動に對し、歐洲では既に宗教擁護運動が出來て居る。日本には未だ宗教擁護運動のあることを聞かない。是非宗教家の一考を望む。既成宗團の人々には、どうもこの研究が足りなひ樣に思はれる。

最近の我が國の新聞雜誌を見よ。意識的に反宗教の記事が書いてある。一寸し

た文章の中にも發見することが出來る。所謂、無神論者の擡頭である。

日本に於いては、明治維新の際、排佛毀釋と云つて佛教の受難時代があつた。これは佛教に入り佛法を棄てて、日本精神を高唱した山崎闇齋先生の如き國粗者に依つて叫ばれた排佛論の影響の結果であるが、かかる受難を蒙つた佛教が漸く信教の自由を保障され、安全時代を確立するや、忽ち今日の如き既成宗團の安逸狀態を作り出して仕舞つた。少しも排佛毀釋が爾後の佛教に對して、生成發展の楔機とはならず、依然鎌倉時代の佛教を出でをらぬ。私は佛教の末法說を擔ぎ出して、世を悲觀絕望するものではないが、現在の佛教は造寺堅固であつて、次の開諍堅固の時代を想像せしめられる。宗內の管長選擧の醜惡は聞くにも堪えぬものがあるではないか。眞風地に墜つといふものである。

佛教各宗團が國家の爲に國體明徵の爲に、眞に日本佛教の眞面目を發揮して、國民精神確立の爲に積極的な努力をしたことがあらうか。私は今日、一人の日蓮

一人の道元なしと云ひたい。尤も今日の時勢に於いては、鎌倉時代の日蓮上人そのままが再生されても困る。今日の日蓮上人でなければならぬ。豊臣時代の蛇の目の帽子に片鎌の槍のままで加藤清正が出現しても困る。矢張、今日の時勢に適應し、時代の精神を體した日蓮上人であり、加藤清正公でなければならぬ。

反宗教運動は單に蘇聯のみならず、各國に於いて各種の形態をとつて運動に出て居る。これに對し殊に日本の宗教家の努力の足りないことをつくづく感ずるのである。他面佛教に於ける佛國土の觀念が我が國體觀念と離隔するに從ひ、且今日の如き醜惡の姿では、國粹者から再び排佛の運動が起きぬとも限らぬ。共產主義者は此の佛教の弱點を突くべく考へて居るのであることを忘れてはならぬ。

話は一轉するが、一昨年、卽ち一九三四年に蘇聯は國際聯盟に加入した。此の國際聯盟は大體に於いて社會主義的卽ち第二インターナショナルの思想である。此の國際聯盟に蘇聯が加入したことに依つて、第二、第三インターナショナルの

提携が出來た譯である。

當時私も蘇聯の國際聯盟加入は、將來の歐洲政治の攪亂の基になると警告して置いたが、果して先づ佛蘭西が社會主義國となる以前に、西班牙が共産主義に近い政府を樹立した。續いて佛蘭西も社會主義の政府となつた。

今回の西班牙革命は同國の國粹主義者が憤起して、西班牙を共産主義の毒惡から救はんとしたに起因して居る。實に蘇聯の共産主義が歐洲に入り、國際聯盟と結んだ爲に、各國に共産主義思想が漫延し、その勢力が增加し、歐洲は攪亂されてゐるのである。

昨年は第七回の國際共産主義大會が露都に開かれた。その席上で議決した事はファッショに對する思想上の宣戰布告、反ファッショ戰線の統一であつた。ファッショと一口に云はれて居るが、それは民族主義、國家主義と云ふ事に蘇聯では解釋して居る。卽ち伊、獨、日本等を指して居るのだ。これに對して戰をなす戰

線を統一すると云ふのだ。共産主義と資本主義は犬猿只ならぬものであるから、資本主義を敵とすべき筈であるのに、ファッショを敵とする爲にはブルジョア、デモクラシイの國であらふとも、手を握り合つて民族主義、國家主義に當らねばならぬと云ふ決議をしたのである。卽ち手段の爲には資本主義的民主國でも構はないのだ。勿論社會主義民主國は親類筋だから手を繫ぐのである。かくして共産主義、各社會主義の提携が卽ち人民戰線と云ふものである。蘇聯は第七回の決議を着々として實行に移して來た。佛蘭西、西班牙のみならず、最近日本國內にもこれが結成が企てられ、世の中を騷がし始めて居る。

我國は　天皇の御國である。佛敎も是　天皇の佛敎である。私共が昨年苦戰した機關說排擊卽ち　天皇は國家の機關であると云ふケシカラヌ說は、卽ち人民戰線の學說であるのだ。

天皇と臣民とは切つても切れない密接な關係にある。山崎闇齋先生は

「君臣中」と云つて居る。卽ち君の仁慈と臣民の忠誠との感應道交圓融相別である。卽ち親子の關係である。十七憲法卽ち聖德太子のお定めになつた憲法の第一條に

「和を以つて貴しと爲す」

と云はれ、第二條には

「篤く三寶を敬ひえ」

と云はれて居る。「和を以つて貴しと爲す」とは卽ち「君臣中」である。中庸では

「中和を致して天地位し萬物育す」

と云つて居る。此の中は大きな意味を含んだ中であつて大中である。決して右と左を考へて比較しての中であると云ふ樣な簡單なものではない。我が國の國家主義は中道で、否らざるものが左翼或は右翼である。併して國家主義は其の中間で中であると云ふ樣な比論ではないか。此の中和は東洋哲學の中心思想を爲し、我

が建國の大精神に顯現するが、說いて盡し得ぬ絕對論である。此の日本精神を十七條憲法の第一條に掲げ來り、第二條に佛敎の「篤敬三寶」を載せ、此の兩思想を圓融相別し、因緣づけて第三條以下が說かれたものだと言はれてゐるのが、聖德太子の十七條憲法である。此の精神は又、現在吾々臣民が奉戴する處の明治欽定憲法の御精神であり、一般法の精神でもある。卽ち和を以つて貴しとなして、決して階級鬪爭的ではない。卽ちこの精神には勞働者が相團結して、自分の力を惡用し、或は資本家が權力を振ひて勞働者を壓制する如きことなどはない。この意味に於いて社會主義的唯物論的の勞働組合法などは國法に合せぬものである。

若槻男爵は曾つて

「ストライキは勞働者の權利なり」

と云つて居るが、之れは日本精神を識らぬけしからぬものである。國を破滅に導くと云ふのが人民戰線の思想であり、和を以つて貴しとするが日本精神である。

日本の政治家は日本精神を忘れて居る。餘りにも外國の精神を外國の法律を眞似て、而も扨子定規である。これでは國は治まらない。日本の國家は　天皇の國家である。この肇國の精神を其の儘に憲法に御示しになつてゐる。

天皇は御仁慈を垂れ給ふ。臣民は忠誠を捧げ奉る。我が國の古典を通じて現はれる精神を清明心と呼びなすに到りしが、破邪顯正を楔機とした君臣中の和の精神である。明きことは日の如く、清きは大空の如きである。哲學的の絶對精神であつて、直き心で、自然心とも述べる人がある。この心の現はれが日本歴史である。我が國史の中心思想は　皇室に存しまつる。今神皇正統記の一說を以てすれば「唯我國のみ天地開けし初めより、今の世の今日にいたるまで、日嗣を受たまふ事邪ならず。一種性の中に於ても、自ら傍より傳へ給ひしすら、猶正に歸る道ありてぞ、保ちましける。これ、しかしながら神明の御誓ひあらたにして、餘國に異るべきいはれなり。……神代より正理にて受傳へつるいはれをのべんこ

とをしるして……神皇正統記と名づけ傳るべき」と。かく精明心は發露す。しかも此の世界冠絶の歴史精神、肇國精神は我が國史を一貫無窮にする精神にして、換言すれば歴史とは世界史の流轉、變化を意味するが、我が國史には其の變化を通じて連續一貫の精神が流れるのである。爲政家は之れを把握せよ。宗教家は佛國土の顯現に對して遺憾なきや否や。

楠公は早く禪宗に歸依し、師家について「省」ありと傳えられてゐる。

楠公は湊川出陣に先だち、其の献策が容れられず、愈々死を決して出陣と云ふ時、勿論楠公は幾多の合戰に、死は鴻毛よりも輕く、全身のみならず一族をも擧げて　天皇に捧げて居られるのであるから、死を惜しむといふ心は毛頭ないのであるが、未だ楠公御自身は、生と死との間に一點の不審があられたと見え、湊川出陣前に明の極俊禪師を廣嚴寺に訪ねられて問答をされた。

公「生死交謝時如何」

つまり生死代謝の際、生と死の區別は如何と問はれた。これに對し禪師は

「兩頭惧裁斷、一劍倚天寒」

と答えられた。兩頭は生と死を云ふ。そんな相對は、ブチ切れと云はれたのである。其處で楠公は更に

「畢竟如何」

と問はれると、禪師は「喝」と一喝威を震ふとあるが、楠公はハット思つて全身に汗を浴びて禮拜をされた。

その時禪師は

「儞は徹せり」と許されたのである。

乃ち楠公は

「私が今日推參しなかつたら、大悟をすることは出來ませんでした」

と佛殿に入り三拜燒香して立ち去られ、翌日湊川に赴かれ、野守十五戰、終に刀

折れ矢盡き、無爲庵に入り一族郎黨と列坐自刄をされた。禪師は衆を率ひ庵に入り、遺骸を庵後に葬られたのである。誠に壯烈無比とや申さん。

次の古歌「水鳥の行くも歸るも跡絶えてされども道は忘れざりけり」に生死觀を體せねばならぬ。しかも日本歴史の精神は、正念相續であり、この古歌に變化裡、一派一貫の精神を傳えてゐる。

楠公の七生報國の精神は卽ち「是」である。日本精神そのままの現れである。而も現在今日、未來永劫生きて居られるのである。

清明心は日本の建國以來の歴史的精神である。歴史は時代によつて異り「歴史は一回限り」であるが、これを貫ぬいた道清明心は失はれてはならぬ。全く水鳥の理と同じである。一貫した精神は變はらない。

國體精神が現はれない佛敎では、我れには佛國土ではない抽象のものである。駄目である。處が最近どうも、どの宗敎も只南無妙法蓮華經、南無阿彌陀佛で、

深く現實國土に生きて衆生を濟度し、國土を濟度するの精神が乏しいのである。日蓮上人は國亡びて佛法なしと說かれたが、この「國」たる肇國の精神に基く皇國でなければならぬ。

「この道や行く人なしに秋の暮」

淋しいことである。

「古の人の踏みけん古道は荒れけるかも行く人なしに」

良寛は寂涼を歌ふた。

宗教界を見渡すに、一人の日蓮上人も道元禪師も見當らない。荒涼たる砂漠を行くが如しだ。宗門の管長選擧は賑やかな事であるが、佛教界が只安逸を貪るならば、近き將來に於いて必らず第二の排佛毀釋を蒙るであらう。佛教大學で日本の古典を研究して居るかどうか。日蓮の立正安國、榮西の興禪護國傳教の守護國界章を如何とすべきか。精進せずして佛國土の建設が可能なりと爲すや。

昭和十一年九月廿五日　印刷
昭和十一年九月廿八日　發行
定價拾錢　送料共
東京市澁谷區幡ヶ谷本町二ノ三五三
編輯發行兼印刷人　內田剛藏
東京市芝區田村町四ノ九
印刷所　邦友社印刷所
代表者　渡邊光三郎
東京市澁谷區幡ヶ谷本町二ノ三五三
發行所　地湧日本社
振替東京八六三三六
事務所　東京市麴町區內幸町一ノ五
電話銀座(57)六四五二

◇純正日義主本宣揚◇
◇新聞の豆戰艦◇

地獄日本

旬刊　毎月一の日發行
一部十錢・一年三圓
—(購讀申込前金)—

本社　東京市澁谷區幡ヶ谷本町二ノ三五三
事務所　東京市麴町區內幸町一ノ五

振替口座東京八六三三六番
電話銀座六四五二番

終